

「弱さって、社会的」、気候変動問題を核に、 「数」や「勝ち負け」にとらわれない社会へ

Interview

『record 1.5』共同代表
山本 大貴さん

2018年8月にグレンタ・トゥーンベリの学校ストライキから始まった気候危機対策を求める運動「Fridays For Future (未来のための金曜日)」は、瞬間に世界中の若者ムーブメントとなった。山本大貴さんも日本の主要メンバーとして、多くのメディアに取り上げられてきたが、それを「若者であることだけを切り取られてきた」と感じ、次なるチャレンジとして「気候変動」の前後に内包されている課題や脈絡を含めて、「そのまま」記録として残す活動をスタートさせている。そんな彼に、自身が抱えるジレンマ、そして本質を追求する中で描いている夢について聞いた。

気候変動問題の源泉は「声なき人の声」 さまざまなイシューに取り組む人たちと連帯したい

インタビュー・ブランシャール明日香さん(杉並区議会議員)

学生として切り取られていた自分から、「そのまま」記録することの重要性を認識

高校生のときから、気候変動のムーブメント「Fridays For Future」に携わり、アクションをスタートさせていますが、まずはそのきっかけは何だったのでしょうか？

山本 きっかけとなったのは、僕が高校1年の2019年10月の台風19号で初めてボランティアに参加したことだったように思います。赴いたのは栃木県でしたが、そこでテレビなどには映らぬ多くの惨状に遭遇し、リアルな衝撃と向き合う中で、災害が起きないようにすることを模索し始めて、気候変動の重要性に気づきました。また、翌年の3月にコロナによる「緊急事態宣言」が発出されて、社会そのものがどうなっていくんだろうという不安に駆られる中、学校の「SDGsの会」というサークルで、仲間たちとZoomを通じて議論していたところ、1人が「Fridays」のメンバーで、彼の紹介でオンライン会議に参加して、アクションへのめり込んでいきました。

現在の活動、気候危機を記憶する発信型ムーブメント「record 1.5」について教えてください。

山本 「Fridays」で一緒に活動していた共同代表の中村涼夏も、僕と同様メディアが若者であることだけを切り取っている、「そのことは本質的な問題を阻んでしまう可能性がある」と疑問を感じていました。「気候変動」の危機感を、前後に内包されている課題や脈絡を含めて、「そのまま」記録し、多くの人と共有したいという思いから立ち上げたのが「record 1.5」です。現在、その記録映像がドキュメンタリー映画として公開されていますが、最初の題材に「COP27」を選んだのは理由があります。開催国であるエジプトが、宗教・主義・人種・文化などといった気候変動の周辺にある問題を多様に持ち合わせているにもかかわらず、日本のメディアはそのことを「ミミも伝えないだろ」と思ったからです。

実験から感じた日本社会の現在地
そこに思考停止を拒否する自分がいた

国策や自治体の動きについてはどうお考えですか？

山本 やるせなさや困った感がありますね。「Fridays」の頃から各政党と意見交換したり、外務省・経済産業省・環境省の担当者や大手企業の人たちと話し合う機会をいただけていますが、そういう場での僕の主張のバックボーンとなっているのは、「声なき人の声」に他なりません。自治体については、国政と比較して、議員との距離が圧倒的に近く、

話の場を持ちやすいだけに、気候市民会議などの具体的なアクションを通じて、成功事例の好循環が生まれることに期待しています。

最後にになりますが、山本さんの「夢」は何ですか？

山本 気候変動というレイヤーにおいては、これを人権や他のさまざまな問題に取り組んでいる人たちと連帯できるイシューにしたいというのが、夢というか、僕が追い求めている理想です。コアメンバー同士ではそこができていますが、それぞれの運動を応援している人たちにはまだ十分に浸透していないように感じています。また、生き方としては、「数」や「勝ち負け」にとらわれない社会に近づけていくことを夢というか、目標にしようと考えています。自分が入院した際に、「病気に苦しんでいる人がたくさんいること」を実感して、「弱さって、社会的だ」と思いました。そのためにも、思考停止にだけは絶対に陥りたくないと、日々、試行錯誤しています。



ブランシャール明日香さんと山本大貴さん

【山本 大貴さんプロフィール】

2003年東京都生まれ。慶應義塾大学総合政策学部在籍中。2020年4月、「Fridays For Future」にオーガナイザーとして参加後、2021年4月には日本の2030年温室効果ガス削減目標の引き上げを求めて学校ストライキを実行。また、「音楽×気候変動」をテーマとするライブイベント「Climate Live」において、日本チーム「Climate Live Japan」の初代共同代表を務める。現在は、気候危機を記憶する発信型ムーブメント「record 1.5」を、「Fridays」で一緒に活動していた中村涼夏と設立して共同代表となり、最初の作品として「COP27ドキュメンタリー 気候危機が叫ぶ」を公開中。学校講演や、再生可能エネルギーに関するワークショップの講師も務めている。

下記 URL にてインタビュー全文掲載
<https://greens-japan-tokyobranch.jimdo.com>

南風(まぜ)に乗る

戦後の沖縄を巡る3つの「風」から、いま本土から送るべき「風」を考える

タイトルの「南風」に注目。「まぜ」というルビが振られている。本書は1951年のサンフランシスコ条約で日本から切り離され、米国軍事占領下に置かれた沖縄が1972年に復帰するまでの戦後史を題材にした小説である。沖縄では南風をバイカシ、フェーカジなどと表現するので、まずはそこに疑問が湧いた。調べてみると、瀬戸内や高知から伊豆にかけて、夏の風を「真風(まぜ)」と呼ぶ地域があるらしい。読み進めていくと合点がいく。本土から沖縄へ向けては気象学的にはもちろんだが、政治的にも冷たい風しか吹いていない。そうではない風を、著者は沖縄に向けて吹かせたかったのであろうと……。

また、小説でありながらも3人の主人公が実名で登場する。那覇市長や市民活動家として祖国復帰運動に身を捧げ、米国力から最も恐れられた「不屈の男」瀬長 竜太郎。沖縄出身ながら、パスポートを取得できずに東京で貧乏生活を送り続ける詩人・山之内 隼。そして、護憲の立場から沖縄返還を主張し、安保反対で真っ盛りの1960年に「沖縄資料センター(法政大学沖縄文化研究所に継承)」を東京に設立した英文学者・中野 好夫だ。

ノンフィクション手法のミステリーとしては松本清張の「小説銀事件」が有名だが、ミステリー作家として名高い香月もやはりロジカルな手法で読者を巧みに引き込む。一方、主人公3人のキャラクターを丁寧に描き、それぞれの「風」を交差させることで人間味溢れるエンターテインメントに仕上げている。瀬長が担う当時の沖縄で吹き荒れていた「風」、山之内が東京から沖縄への思いをさせる「風」、沖縄から学び・行動する中野の本土からの苦悩の「風」である。三重県生まれで学生時代を神戸で過ごした著者は、紛れもなく本土の作家だ。だからこそ、沖縄と向き合う際のシレンマが内包され、読み手の心に刺さる。県民投票で71.7%が反対票を投じ、軟弱地盤・活断層が発覚しても、力を持つ者たちは声を無視して辺野古新基地建設を強行し続ける。琉球弧における自衛隊基地問題を含めて、沖縄が本土からの温かい「風」を待望していることを本書からも感じた。

奥平 等 (株)メディア・パラダイム研究所主宰 IT/DXを中心に記者・マーケティングプランナー、コピーライターとして時代の変遷をウォッチ。「1人ひとりが強う」を生きる指針に、インクルージョンへの活動を展開中。



南風(まぜ)に乗る
2023年3月
小学館刊 1,800円+税

追悼 ロビー・ロバートソン

The Bandの絆を象徴する「かつて彼らは兄弟だった(Once Were Brothers)」

アメリカを代表するバンド「ザ・バンド」のロビー・ロバートソンが亡くなった。1960年代中期、ボブ・ディランと共にニューヨークの北、ウッドストックの地でともに制作活動に励み、1968年に「ミュージック・フロム・ビッグピンク」を発表。ヒッピー文化、サイケデリックミュージック全盛の時代に大地に根差したサウンドで一躍注目を集め、イギリス在住のエリック・クラプトンをして「彼らのバンドに入りたい」と言わしめた。やがてディランと大規模なツアーを続け、その名を不動のものにしていく。

ロックにカントリー、フォーク、R&Bといったアメリカのルーツミュージックの要素を色濃く反映させたバンドであったが、実は結成はロンドンでオリジナルメンバーは4人のカナダ人と1人のアメリカ人(リヴァン・ヘルム)。その中心人物であったロビー・ロバートソンの母はネイティブアメリカンだった。幼い頃から遥かアメリカ南部から流れてくるラジオ番組に耳を傾け、やがてギターを手にし、その地への想いを強くして行く少年だったという。

折りに触れて思うのだが、実際に現地に生まれ育った人間より、他所から俯瞰している人間の方が、その土地の人が忘れていた伝統や良さに気付くことが多いのではなかろうか。現在の日本を訪れる海外旅

行者が著名な観光地のみならず、日本人の気が付かないあるいは忘れていた地域や場所に魅力を感じ、訪問するのはその典型であろう。つまり、遠く離れたアメリカ南部への(いわゆる白人でさえない)余所者ならではの強い憧れと思いが、「ザ・バンド」の音楽には凝縮されている。やがてそこに気付かされたアメリカ人が、自らのルーツミュージックとして再発見・再認識するに至ったような気がする。

映画「ラスト・ワルツ」はそんな彼とバンドの歩みが結実した一夜の記録だ。例え、それが「終わりの始まり」であったとしてもこの映画の中の彼らは強く結ばれていた。何しろ「かつて彼らは兄弟だった(Once Were Brothers)」のだから……。「Once Were Brothers」は、結果的にロビー最後のソロアルバムとなった2019年リリース「Sinematic」の2曲目に収録されている曲でもあり、ロビーの自叙伝をもとに全米で2020年に公開されたドキュメンタリー映画のタイトルでも使われている。合掌。

佐藤 ユキオ 現職「Bar 461」店主。20歳から飲み屋稼業に従事し、37歳で同店を開業。オヤジBand 大会で優勝経験を持つ、ドラマーでもある。店では小規模ながら温かいLiveを実施。数多くのアーティスト、ミュージシャンと交流を持つ。



Sinematic
レーベル: Universal Music

「映画的な」を意味するタイトルは、ロビーが数10年間続けてきた映画のためのソングライティングなどを通じて、彼のドラマティックな人生を示唆している。ラストアルバムとなっただけに、ワン・モリソンをはじめとする豪華ゲストの参加も感慨深い

映画「福田村事件」 監督: 森達也

「1923年福田村の虐殺」という歌をぼくが作ったのは、森達也さんが2003年に発表した「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」という本の中に収められている「ただこの事実を直視しよう」という文章を読んで、1923年9月6日に千葉県旧福田村で起こったできごと、いわゆる福田村事件を初めて知ったことがきっかけだった。こんな史実があったのかとぼくは強い衝撃を受けて、アメリカのフォークソングのバラッドと呼ばれる物語歌の形式を用いて、23番に及ぶ長い歌を作った。2009年6月のことだった。

歌にする時にぼくがかがけたのは、まさに森さんの文章のタイトルである「ただこの事実を直視しよう」ということだった。森さんの文章やぼくがネットで調べて見つけた新聞の記事や集会の報告書、ブログなどをもとにして、起こったことだけをとにかく正確に伝えたいと考えた。とはいえ歌を作っている時点ですでに86年前のことでできごと、きちんとした資料もあまり残っていない。自分で正しいと信じて作って歌うことも、事件のことを詳しく調査している人たちがおかしいと指摘されたりすると、その都度歌詞に細かな変更を加え、できるだけ事実を正しく歌おうとしてきた。

この福田村事件をテーマにした劇映画「福田村事件」が完成し、関東大震災から100年となるこの9月1日から劇場公開され、大

きな話題となって、たくさんの人たちが劇場に足を運んでいる。映画の監督は森達也さんで、これまで数多くのドキュメンタリー映画を手がけてきた森さんにとっての初めての劇映画作品となる。

映画「福田村事件」は、実際に起こった事件をもとにして、そこにさまざまな架空の物語、架空の展開、架空の登場人物、すなわち虚構を加え、脚色して作り上げられている。もちろん歌と映画とは表現の仕方がまったく違うが、ぼくがひたすら史実を忠実に歌おうとして「1923年福田村の虐殺」を作ったのに対し、劇映画の「福田村事件」は、考え抜かれ、研ぎ澄まされた虚構を事実に加えることによって、史実をより重層的に、そこに興行きや広がりを入れて浮かび上がらせようとしている。映画「福田村事件」を見てぼくは事実と虚構や架空を加えること、「脚色」というやり方が発揮する圧倒的な力に感嘆させられてしまった。史実を忠実に描くことと史実に脚色を加えて描くことは、方法こそ正反対のように思えるが、その志や目指すところは同じで、映画「福田村事件」のように事実のフィクションライズが奏功すれば、とんでもない力を発揮するのだと強く思い知らされた。

中川五郎 1960年代後半から歌い続けるフォークシンガー、詞作家、音楽評論家、小説家、エッセイスト、翻訳家、自身、「1923年福田村の虐殺」を歌い、本作品の企画協力者にも名を連ねている。



1923年9月、関東大震災から5日後の千葉県東葛飾郡福田村。朝鮮人に対する悪意ある流言飛語を信じた村人たちによって、香川からやって来た行商団9人が殺害される事件が発生する……。「A1/A2」など、数々の社会派ドキュメンタリー作品を手掛けてきた森達也が自身初の劇映画作品として、本事件に迫る。
©「福田村事件」プロジェクト 2023

BOOK

MUSIC

CINEMA

Greens People

音楽やクリエイティブな要素を使って気候危機に向き合いたい

黒部さんが気候変動の問題に取り組んだきっかけは、「高3でスウェーデンにSDGsの研修を受けに行った際に、社会システムごと変えていこうという先進的な気候変動対策を学び、日本の遅れにショックを受けたこと」だったそう。2022年エジプトで開催された COP27に山本大貴さんと参加した印象は、「気候変動の被害をより多く受ける立場(通称 MAPA)のアクティビストたちが、先進国に住む人たちにその責任を問うスピーチをしていたこと。今まで声を上げる時は、若者として将来被害を長く多く受ける「被害者」の立場から話すことが多かったが、先進国に住む人として「加害者」でもあるということに改めて自覚させられた。それと同時に、「連帯」という言葉もたくさんスピーチで使われていて、自分の立場だからこそできることをやり、世界中のアクティビストと連帯していこうと思った。」とのこと。Fridays For Future Tokyoのオーガナイザーと共に音楽家としても活動されている黒部さんの、クリエイティブな活躍に期待しています。(R)



COP27会場



国立音楽大学4年
黒部 睦(くろべ むつみ)さん

Fridays For Future Tokyo オーガナイザー

編集後記 今年の夏は本当に暑かった。地球温暖化という事象の中で、世界中で気候災害が頻発している。1.5℃目標はまさに瀕死の現状だ。しかし希望もある。東京を中心に若者や女性の政治参加が進み始めている。あきらめずに行こう。未来の子供たちのために。(R)

編集 大場 亮 編集協力 デザイン:石井千春 撮影:山下恒夫、取材・編集・執筆:奥平等

緑の党 グリーンズジャパン 東京

発行:緑の党グリーンズジャパン東京都本部
〒165-0026 東京都中野区新井 2-7-10 サンファスト 301
TEL: 03-5364-9010 / FAX: 03-3389-0636
https://greens-japan-tokyobranch.jimdo.com/